

よし  
吉

だ  
田

ひろし  
紘

学位の種類 経済学博士  
学位記番号 経第37号  
学位授与年月日 平成元年12月14日  
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 商品範疇と貨幣生成の論理

論文審査委員 (主査)

教授 柴田 信也 教授 村岡 俊三  
助教授 大村 泉

## 論文内容の要旨

### 1. 商品分析と価値対象性の批判的解明

本書の研究対象は、『資本論』第一部第一篇第一章「商品」の第三節「価値形態または交換価値」および第四節「商品の物神的性格とその秘密」、同第二章「交換過程」である。それらの課題を明確にし、それぞれの基本的論理構造を別決し、それらの論理展開における相互の関連について明示することが本書の主要な目的である。それらは、商品分析の結果見出される各課題に対応した取り扱いとしてある。

商品分析の結果、商品は使用価値と価値との統一物として把握される。しかし、マルクスは価値範疇について、そこに解明すべき課題が見出されることを指摘する。商品の価値は「抽象的人間労働の凝固物」として規定されるが、そこでは、労働が凝固状態＝対象的形態にあるものとして表現されている。労働がなぜ価値という超感覚的な対象的性格を受け取ることになるのか、このことが解明されなければならない。これが、商品分析の結果から生ずる第一の課題である。この課題の解明についてのマルクスの処理は、二段構えである。第一に、労働が価値として表わされていることの意味が明らかにされ、第二に、本来の問題、労働がなぜ価値として表されることになるのか、が正面切って取り上げられる。前者は価値形態論が、後者は商品の物神性論が受け持つ。以上の事柄について、これまで必ずしも明らかにされていたとは言い難いように思われる。

## 2. 価値表現論的方法的特徴

価値形態論においては、「単純な価値形態」の「相対的価値形態の内実」の論理展開が、その核心部分をなしている。ここでは、リンネル＝上着という等式のもとに、リンネル商品の価値が「抽象的人間労働の凝固物」として表現されていることの意味が明らかにされる。それは、リンネルの価値としての表現内容を再措定することによっておこなわれる。この取り扱いには二つの展開から成り立っている。第一の展開は、リンネル商品の価値実体の生成・その表現の成立について示される。この表現は、リンネルと上着との価値関係から必然的に生ずるものであることが明らかにされる。第二の展開では、リンネル商品の価値実体がリンネルの価値において凝固状態＝対象的形態を受け取っていることの意味が明らかにされる。ここでは、リンネルの価値実体がリンネルではなくそれと価値関係にある上着の現物形態をその実現形態としていることが指摘される。この事態を等価形態に立つ上着商品からみれば、その現物形態がリンネルの価値形態として妥当しているという取り替え＝転倒がみられるということである。価値にたいするこの取り扱いにより、商品の交換価値の存在意味が批判的に解明される。なぜなら、存在性格からみた商品の価値—価値対象性は、商品の交換価値の本質を示しているからである。交換価値の存在性格が、価値関係のもとに、価値実体の生成論的取り扱いとの関連において、転倒した事態にあることが示される。第一の展開が価値実体としての労働の生成論的取り扱いであるとすれば、第二の展開は、労働が凝固状態にあることの意味を明らかにすることから、それは意味論的取り扱いにあることができる。

## 3. 価値形態の発展と貨幣形態の取り扱い

価値形態論の課題は、価値概念—「抽象的人間労働の凝固物」としての商品価値—の批判的再措定にあるが、それは第一節の商品分析の結果に対応したものととして、すべての労働生産物が商品として価値—対象性—をもつことの意味を明らかにするものでなければならない。「単純な価値形態」に続く展開は、この課題を担っている。それは、商品分析の結果与えられた商品の価値規定—価値概念—との対応において、低次の価値形態の不十分さが指摘され、価値形態展開の動力は価値概念と価値形態との適合関係にもとめられている。したがって、それはすぐれて倫理的な取り扱いとなっている。したがって、価値形態の発展過程は、第一節の商品分析の結果としての商品の価値規定への還帰の過程でもある。価値形態論の課題からすれば、一般的価値形態までの展開をもってその役割は果たし終えている。

現行版価値形態論では、初版本文価値形態論とは異なり、一般的価値形態に続き貨幣形態が取り上げられている。貨幣形態については、一般的等価形態の特定商品金への固着化という条件が必要であるが、それは商品所持者たちの現実的な交換行為すなわち諸商品の交換過程の産物として与えられる。したがって、価値形態論への貨幣形態の導入については、それは一般的価値形態と形態的同一性にあることから誤りではないにしても、それは交換過程論の成果を先取りしたものであり、また概念的取り扱いにある価値形態論からみて一般的等価形態の特定商品への固着化

は説けないことから、方法論的にみてなお問題が残る。

#### 4. 商品の物神性論の課題とその問題点

商品の物神性論においては、商品の物神的性格という主題のもとに、価値形態論においてなお残された課題－商品の価値表現における転倒性がなぜ生じるか－が解明される。あるいは、商品分析の結果生ずる課題－労働がなぜ価値として表示されるのか－の解明がそのものとして試みられている。価値形態論を生成論として理解する場合、商品の価値表現の転倒性がなぜ生じるかが明らかになってはじめてそれは生成論として完成されることから、価値表現の生成的取り扱い、商品の物神性論をもって完成されることになる。労働の価値としての表示の生成根拠は、私的諸労働の二重な社会的性格にもとめられる。これは、商品生産の生産関係といってよいのであるが、この生産関係論をもとに労働の価値表示の必然性がいわれる。また、価値範疇は、商品生産の生産関係についての社会的に妥当な主観的な思想形態であるといわれ、それも転倒的なそれであることが指摘されている。

しかし、マルクスによる労働の価値としての表示についての処理はなお不十分であるように思われる。商品生産の生産関係が原因となって抽象的人間労働の成立の必然性がいわれているのであるが、ここからこの社会的実体が私的生産者たちの頭脳に労働生産物の価値性格として反映されるといわれているだけであり、抽象的人間労働がいかなる契機を挺子として労働生産物の価値性格という形態を受け取るのかという点が明示されていない。労働の価値への転成の必然性という肝腎な問題について、なお不十分な処理のままであるように思われる。商品生産の生産関係は、私的労働と社会的労働との矛盾の関係にあるものとして位置づけられなければならない。そこから、私的諸労働の交換関係は矛盾の関係にあること、この矛盾は労働のレベルでは解決されえず、私的生産者たちの意識を媒介にして独自の場業形態を獲得することがいわれる。これは、価値形態の創出であるが、労働の価値表示の必然性はこのようなものとして展開される以外ないものと思われる。

#### 5. 交換過程論の特徴と二つの貨幣生成論

交換過程論においては、商品分析から生ずる第二の課題が取り扱われる。それは、第一の課題においてはひとまず考察の対象から除外されていた商品の使用価値の契機が固有の考察対象として加わり、使用価値と価値との統一物としての諸商品の全面的な持ち手の取り替えという課題が設定される。ここでは、使用価値としての諸商品の関係は特殊な欲望との関係にあることから、特定の使用価値にたいする欲望の担い手として、商品所持者または私的所有者が登場する。交換過程論の考察は商品分析の結果から出発しているのであるが、しかし商品の価値は、諸商品の交換の形態からの分析による本質規定として導き出されたものであり、この規定からみた諸商品の関係は相互に置換可能なものとしてある。しかし、ここでは特殊な欲望と結びつくべき特殊な使用価値をもつ諸商品の全面的な持ち手の取り替えが課題である。この立論においては、交換過程の矛盾とよばれる諸商品の交換の実現不可能が帰結される。価値は諸使用価値の交換の形態を示

す範疇であるから、問題の立て直しが要請される。価値は前提されるものではなくこれから生成すべきもの、それによって交換の形態が与えられるものとされる。そこから、出発点は商品生産の生産関係を表すもの、私的諸個人の労働に置かれる。ここから、価値の再指定をとおしてまた交換過程という社会的行為の産物として、一挙に貨幣形態－貨幣が導き出される。諸説についてみるに、商品分析の結果から出発して設定された交換過程（分析視角的交換過程）と、その固有の困難さから要請される立場の転換にもとづく現実の交換過程との位相差の理解が示されていない。諸説では、貨幣形態－貨幣の導出は、交換過程の矛盾に価値形態論の成果を直接接木することによって与えられている。しかし、マルクスの叙述も、誤解を生みやすいものとなっていることは否めない。

また、貨幣商品金・銀はその本来の使用価値のほか商品の使用価値の実現という課題に対応して、一つの形態的使用価値を受け取ることになる。そこに、商品の交換過程は必然的にW－G－Wという商品の流通過程として展開されることになる。以上のように、貨幣形態－貨幣の生成論は、価値形態論（および商品の物神性論）と交換過程論との二つの説かれ方がなされているといえるのであるが、貨幣結晶については交換過程の産物として与えられることから、価値形態論における貨幣形態は、改めて交換過程論によって根拠づけられるものとしてある。

## 論文審査結果の要旨

### I.

本論文は、その考察対象を『資本論』第一部第1篇第1章第3節「価値形態または交換価値」、同第4節「商品の物神的性格とその秘密」、同第2章「交換過程」に限定し、それらを著者のいう発生（論）的＝生成的展開の諸契機として統一的に把握し、その全体が貨幣生成の論理構造を形作るものであること、を解明しようとしている。ここで発生（論）的＝生成的とは、経済学上の諸範疇の理論的「発生」とその特殊歴史的な性格を批判的に解明する、というほどの含意がこめられているように思われる。また他面では、本論文には、こうした考察を通して広く経済学批判の方法論的特質について考える、という狙いがあるとみることができる。

本論文の構成は、上記の主題に即して、「価値形態論」、「商品の物神性論」、「交換過程論」をそれぞれ第1～3章において独立に取り扱い、その冒頭と末尾に「序章」と「終章」を配して全体の纏まりが図られている。以下、本論文の叙述の順序に従ってその論旨を紹介する。

### II.

「序章」では、上述したような本論文の課題が設定されると共に、それに対する著者の解答が予示されており、併せて本論文のタイトルに託された意味づけが述べられている。著者によれば、価値形態論と商品の物神性論とは商品の貨幣形態の生成論を構成する一対の論理であり、交換過程論

は、これとは別個の観点から貨幣の必然性を論証するものである。「通説」では、商品分析の結果として与えられる商品の本質規定、とくに価値が前提されたまま、価値形態論（および商品の物神性論）においては、商品価値がいかなるものとして現象するか、交換過程論においては、商品に含まれる使用価値と価値との内的対立の現実的な展開過程を追跡すること、がそれぞれの課題であると理解されている。だがそうではなく、その両者共に、商品分析の結果として得られた本質規定（従来の経済学の把握した商品範疇）を批判的に取扱い、商品価値を再措定するものとして理解されなければならない。それがすなわち貨幣生成の論理でもある。本論文に「商品範疇と貨幣生成の論理」という表現を付した所以である、と。

第1章においては、いわゆる価値形態論の課題とそれに対応した論理構造の解明が意図されている。

著者によれば、一般に、価値形態論の課題は「貨幣形態の生成」を示すことにあるといわれるが、立ち入って考察するならば、その基本的課題は、商品が使用価値と価値との統一物であり、価値とは抽象的人間労働の凝固物＝対象的形態であるという、『資本論』第一部第1章、第1・2節における商品分析の結果を受けて、今度は逆に、労働がなぜ価値として表示されるのか、を解明する方向で、換言すれば、商品価値の再措定を通して、商品の価値対象性を批判的に解明する方向で考えられなければならない。

これを「簡単な価値形態」に即していえば次のようになる。「リンネル＝上着」という価値関係において、リンネルの価値表現の生成の論理は、次の二つの展開から成り立っている。第一の展開は、「抽象的人間労働の凝固物」としてのリンネル商品の価値実体の生成および価値表現のメカニズムについて述べるものであり、第二の展開は、リンネルの価値実体がリンネルの価値において対象的形態を受け取り、上着の現物形態がリンネルの価値形態として妥当しているという取り替え＝転倒がみられるというものである。つまり、価値形態論においては、労働が価値として表示されていることの意味が、価値実体の生成と価値表現における転倒性の指摘とによって明らかにされるのである。さらに著者は、このような商品の価値対象性の批判的解明という課題は、ただ一つの商品について取り扱うことから出発し、すべての商品について根拠づけるものでなければならない、としている。価値形態論にいう形態Ⅰから形態Ⅲへの展開は、この課題に対応しており、価値形態展開の動力は、価値概念と価値形態の適合関係に求められる。形態Ⅰからの展開は、価値形態の発展過程であると同時に、商品の価値規定への帰還の過程でもあるのである、と。

なお著者は、価値形態論の基本的課題の展開は、形態Ⅲをもって一応完了しており、現行版『資本論』の価値形態論において、形態Ⅳとして貨幣形態まで説かれているのは、その本来的守備範囲からの逸脱であり、交換過程論の先取りである、としている。

第2章においては、「第3節 商品の物神的性格とその秘密」の詳細なテキスト・クリティークを通して、そこにおける固有の課題の確定と問題点の抽出が試みられている。

著者によれば、労働がなぜ価値という形をとるのかという問いの解明は、価値形態論と商品物神

論の両者をもって初めて可能であり、前者は、使用対象が価値対象性を受け取ることを明らかにし、後者は、使用対象がなぜ価値対象性を受け取るのか、を正面から取りあげるものである。商品の物神性とは、「価値規定の内容」が労働生産物の価値あるいは価値量という物的形態を受け取っているという自体のうちにあり、それがなぜ生ずるかといえば、それは私的諸労働の特有な社会的性格に基づくのである。しかし商品の生産の生産関係のもとにあって、私的生産者達はそこを意識せず、諸物の社会関係＝価値関係しか目に入らない。価値範疇が商品生産の生産関係によって生みだされる転倒的な思想形態であることを示すことによって、価値形態論における価値表現の転倒性—「取り換え」—の根拠が与えられることになる、と。

なお著者は、物象化と物神性との用語上の区別について、社会的生産関係が物的形態をとるに至る「過程」を物象化と呼び、この過程が結果する「状態」を物神性として区別する理解を容認しつつ、商品の物神性の存立構造において私的生産者の意識がいかなる役割を担っているかが一つの重要な論点たりうるとして、商品範疇そのものが人々の意識によって成立していることに注意を喚起している。

第3章では概ね以下のような内容が説かれている。

「交換過程」のテーマは、いわゆる「移行規定」にも明示されているように、これまでの展開においてはただ前提されていただけの使用価値なる契機を取り上げ、これと価値との相互関係を考察すること、言い換えれば使用価値と価値との統一物としての商品を全体として取り上げ、諸商品の全面的持手変換というディメンションでこれを考察することである。こうした課題設定は、やはり商品分析の結果が要請するものであり、これを仮りに「分析視角的交換過程」と名付けるとすれば、その帰結は、いわゆる交換過程の矛盾と呼ばれる全面的持手変換の不可能性である。ここで問題の取扱いにおける「立場の転換」があつて、「現実の交換過程」の発生論的展開へと転回する。ここでは、私的諸個人の労働・生産物を出発点として、それらの全面的持手の変換を通じて一挙に貨幣が形成されるのである。それは、価値形態論とは直接には関係のない展開過程といえるが、ただ、ここでは、一般的等価物の特定商品への骨化＝価値形態論にいう形態Ⅲから形態4（貨幣形態）への移行、の論定が固有の課題となる点が留意されなければならない。従来の諸説にあっては、「分析視角的交換過程」と「現実の交換過程」との位相差が理解されておらず、交換過程の矛盾に価値形態論の成果を直接接ぎ木することによって貨幣の導出が図られている。その意味では、交換過程論、価値形態論の補論的位置付けを与えられてきたに過ぎない、と。

またここで、貨幣商品金は、その本来的使用価値の他に一つの形態的使用価値を受け取り、商品の交換過程は $W-G-W$ という商品の流過程として次の展開を準備することになる、としている。

終章は、以上の展開を総括し、貨幣生成論という観点から、価値形態論、商品の物神性論、交換過程論のそれぞれの位置と役割を簡潔に再論したものである。すなわち、マルクスによる貨幣生成論は、商品分析の結果から生ずる二つの課題に対応して、二面的に説かれている。その一つは、商品価値の神秘的な存在性格の批判的解明という課題であり、これを果たすのが価値形態論と商品

の物神性論であるとすれば、他の一つは、使用価値と価値との統一物としての商品がその全面的持手の交換という事態にかかる課題であり、これを果たすのが交換過程論である。両者一体となって商品の価値の再測定による「商品と貨幣への商品の二重化」が論定されるのである、と。

### Ⅲ.

『資本論』に内在した諸問題のうち、いわゆる価値形態論をめぐる論議は、とりわけわが国でこれまで繰り広げられてきた最も華々しい論争点の一つといえる。そのさい、「価値形態」と「交換過程」との論理的関連をどう把握するかは、当該論争への参加者にとって避けて通ることの出来ない、いわば核心的論点の一つとなっている。本論文の解明しようとした課題も、究極的にはこの一点に収斂するように思われる。

著者が、『経済学批判』、『資本論』初版および現行版等の厳密なテキスト・クリティークを基礎に、関連する文献の渉猟・検討をも十分に行いつつ、この問題を永年にわたって考究し、現時点での到達点を世に問うたのが本論文である。その結論は、如上のように、極めて独自のなものであって、著者自身も「異説」を自認しているのであるが、それは言うまでもなく、著者なりの「考え方の首尾一貫性」を誠実に追及した帰結に他ならない。①商品分析（第1章第1・2節）の結果から生ずる二つの課題、②商品価値の批判的再測定過程としての「価値形態論」、③「価値形態論」と相互補完関係に立つものとしての「商品の物神性論」、④「価値形態論・物神性論」と二元的並立関係にある「交換過程論」、⑤「分析視角的交換過程」から「現実の（発生論的）交換過程」への転回の論理、等々は、著者の自由な着想力に基づく独自の展開となっており、且つそれらを一つの纏まりある全体へと構成していく力量には見るべきものがある。

無論、本論文の対象領域の局限性からくる問題性の拡がりの点や、ユニークな所説であればあるほど自ずと期待される論証力などの点で、本論文には種々の評価がありうるであろうが、著者の強靱な思考力に裏打ちされた、永年にわたる研究成果の集積たる本論文は、当該研究分野に一つの境地を開くものとして評価できる。

以上により、本論文は、経済学博士論文として合格と判定する。